

不登校生徒支援における長期目標としての自立と その過程で生じる葛藤の重要性の検討

山田裕子^{1)*} 宮下一博²⁾

¹⁾東京学芸大学連合大学院教育学研究科・博士課程 ²⁾千葉大学・教育学部

The importance of independence as a goal of nonattendance students support and conflicts in the process

YAMADA Yuko^{1)*} MIYASHITA Kazuhiro²⁾

¹⁾Doctoral Course, The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University, Japan

²⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

近年、不登校問題は、ニートなどの社会的コストにつながる問題であることが指摘されており、将来の自立を目標とした不登校への対応が、学校臨床における最重要課題の1つとなっている。最近では、従来の不登校に加え、深い心理的葛藤を抱えない様々なタイプの不登校像が現れており、その支援のあり方を検討することは重要と言えよう。本論文では、葛藤を1つの鍵概念として、多様な要因や背景をもつ不登校生徒に対する、自立を目標とした支援のあり方を検討することを目的とする。第1に、不登校問題の歴史を振り返り、多様化する現代の不登校の要因や背景について整理する。第2に、様々な不登校生徒像を6つのタイプ別にまとめ、葛藤を鍵概念として、それぞれの対応のあり方を検討する。最後に、自立を目標とした不登校支援のポイントをまとめる。

Nonattendance at school is currently considered as a problem that may increase social cost, such as NEET, in future. Therefore, working on this problem with a goal to help nonattendance students to be independent in future is one of the important themes at school. Addition to the traditional type of nonattendance students, there are different types of nonattendance, such that students may not have any conflict by not going to school. Considering how to approach such cases would be important. The purpose of this paper was to discuss, using "conflict" as a key concept, how to help nonattendance students with various factors and backgrounds to deal with their problems with a goal of being independent in future. First, the history of problem about nonattendance at school, and various factors and backgrounds of the problem were examined. Second, a variety of nonattendance students were integrated into 6 types, and different approach for each type was considered using "conflict" as a key concept. Finally, the important factors to help nonattendance students to contend with their problems with a future goal of independence were discussed.

キーワード：不登校 (Nonattendance at school) 支援 (support) 自立 (independence) 葛藤 (conflict)

はじめに

文部科学省によると、「不登校生徒」とは、「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」と定義されている。平成4年3月の学校不適応対策調査研究協力者会議の報告「登校拒否(不登校)問題について」(以下、「平成4年報告」という)では、不登校を「どの子どもにも起こりうる問題」と定め、不登校に対応する上での基本的な視点や取り組みに関する提言が打ち出されている。その後も継続的に対応が検討されているが、平成18年度の「不登校」を理由とする長期欠席者数は、依然として中学校で10万2,940人に上っており、その状況改善に向けての難さ

が窺える。最近では、ニート、つまり、非労働力人口(就業者でも失業者でもない人々)のうち、年齢15～34歳、学卒、未婚者であって、家事・通学をしていない若者、の約4割は不登校を体験していることが厚生労働省の委託調査で明らかとなり、不登校は学校教育だけの問題ではなく、その後の社会的コストにつながる問題であることが指摘されている(小杉, 2004)。また、平成4年報告にもあるように、近年の子どもの傾向として、社会性等をめぐる課題が指摘されており、特に不登校生徒の多くが、その問題抱えていると言われている。不登校は、将来的に社会に影響を与える問題であり、登校するかしないかという現象面よりも、不登校生徒が将来社会に出て適応していける力をいかにして育むことができるかということが、より重要となってきている。このような流れから、不登校生徒に対応する上で、単に登校することを目標とするのではなく、「生徒が自らの進路を主体的にとらえ、社会的に自立すること」を長期的な支援

*連絡先著者：山田裕子

目標に据えることが重要とされている。社会的コストを削減するという予防的な観点からも、不登校への対応は、学校臨床における最重要課題の1つと考えられる。

不登校生徒を支援する上で、「葛藤」をどのように取り扱うかは非常に重要と考えられる。例えば、60年代に現れた不登校では、不安や過剰な適応努力等から生じる小児神経症的な失調がその本質であったため、「学校に行かなければならぬに行けない」という葛藤が本人や家族に対する過度の心理的圧迫となり、悪循環を引き起こす傾向が強かった。そのため、対応としては、登校刺激を避けることにより葛藤を軽減し、子ども自身の主体性を育てていくというアプローチが主流となった（滝川、2005）。このような事例では、子ども自身が問題を感じ、悩んでいるため、保護者や教師は困っている子どもをどのように支援するべきかという視点に立って考えられるので、援助が成立するのである。しかしながら、文部科学省により平成15年に報告された不登校経験者の実態調査（「今後の不登校への対応の在り方について」）によると、「学校へ行きたかったが行けなかった」という葛藤を抱える事例は依然として少なくないが、学校へ行かないことに何ら心理的負担を感じない者も相当数いることが報告されており、悩まない（もしくは、悩めない）不登校の増加が指摘されている。このような場合は、当事者である子ども自身の問題意識が低いため、登校刺激を避け、葛藤を軽減するだけでは外へ押し出す力が生まれず、かえって問題が長引き、しばしば対応困難な事例となることが多いと思われる。更に、子どもだけでなく、保護者の問題意識も低い事例に関しては、学校が対応する中でもより困難を極めると言えよう。子ども本人や保護者が困ることによって問題が事例化し、解決に向けての対応策が取られていくという一般的な相談及び支援の流れを考えても、適度な葛藤や悩みは、不登校という状況を打破していくためには必要不可欠と考えられる。よって本論文では、葛藤を1つの鍵概念として、多様な要因や背景をもつ不登校生徒に対する、社会的自立を目標とした支援のあり方を検討することを目的とする。第1に、不登校問題の歴史を振り返り、多様化する現代の不登校の要因や背景について整理する。第2に、様々な不登校生徒像をタイプ別にまとめ、葛藤を鍵概念として、それぞれの対応のあり方を検討する。最後に、自立を目標とした不登校支援のポイントをまとめる。

不登校問題の歴史

滝川（2005）によると、日本に「不登校」という臨床概念が生まれたのは、1960年頃である。1940～50年代は、戦中戦後の混乱の中であり、長欠事由は、病気や経済的理由によるものが大半を占めていた。戦後復興による進学率上昇に相関して、長欠率は低下していったが、1950年代末から60年代初頭にかけて、「学校に行きたい（行くべきな）のに行けない」という新たな長欠現象が、大都市部の小学校低学年に出現した。当時、この欠席現象は小学校低学年に特有であったことから、家から離れたくないことが原因とする分離不安説が有力となり、その背景として、親子間の過保護・過依存が指摘された。と

ころが、1960年代半ばになると、同様の現象が中学生にも及び、当初の分離不安説だけでは説明しきれず、子どものパーソナリティ特性と学校状況との関わりにおける何らかの心理的躓きが指摘されるようになった。この頃より、不登校は、非行・怠学による長欠と区別される新たな問題として注目されるようになった。この時代の不登校は、学校へ行くことが当たり前という中での例外的な現象であり、強い心理的葛藤や学校に対する恐怖心等の、特徴的な臨床像を示すものであった。ところが、進学率が上昇した1975年以降、この定型的な輪郭が崩れ、不登校の臨床像が多様化・あいまい化したことにより、不登校による長欠が増加傾向に転じたと言える。例えば、一見すると元気なのに登校できない子、長期間休みながらも体育祭などのイベントだけは普通に参加できる子、うつ病などの病気を自ら主張し、気ままに登校する子など、従来の不登校の枠組みでは理解しきれない子どもたちが出現しており、また、それが特別な例ではなくなっているのである。そのような流れから、1990年には文部省が、「不登校はどの子にも起こりうる」との見解を打ち出し、不登校は特異な問題ではなく、一般的な問題と考えられるようになった。滝川（2005）が述べるように、現在は、些細な葛藤や躓きからたやすく不登校が起こる一方、不登校自体が激しい葛藤をもたらしは少なく、深い心理葛藤に代わり、漠然とした学業意欲の低下や不全感にうつつら覆われた輪郭のぼやけた不登校が目立つようになったのである。1980～90年代にかけては、適応指導教室やフリースクール等、不登校の子ども達の居場所作りが盛んになり、学校に行けないこと自体に対する葛藤や問題意識は薄れる傾向にあった。ところが、1990年代末から2000年にかけて、先述した不登校と引きこもりの関連が指摘されるようになり、不登校への支援の重要性が新たな視点から見直されるようになったと思われる。現在は、単に「学校へ行くこと」を不登校の支援目標にするのではなく、その先にある社会での自立・適応を目標とした、長期的視野に基づく支援が求められていると言えよう。

不登校多様化の要因・背景

不登校像が多様化している要因や背景について整理してみると、いくつかのことが考えられる。まず第1に、時代の変化が挙げられよう。滝川（2005）によると、中学生の長欠率が上昇に転じたのは、高校進学率が90%超、大学進学率が40%超に達し、日本が「高学歴社会」に突入した1975年以降である。高学歴が一般化してその希少性を失ったことにより、いつの間にか高校や大学は、何かの目標のために通う場所ではなく、「行かなければ落ちこぼれる」という半義務的な場所になってしまったと考えられる（滝川、2005）。「学校へ行きたい」、「学びたい」という欲求が子どもの内側から湧いてくる以前に、「とりあえず高校ぐらいは出ておかない」という風潮から勉強しなければならなくなり、その結果、目的もわからず高校や大学へと進学を決める子どもが増えていると思われる。時代の変化とともに、学校の意味合いが変わり、学校が人生目標や将来の職業に対する夢や希望

につながりにくくなっていることが、不登校増加の大きな一因と言えよう。

第2に、高学歴を当たり前のように求める一方で、世の中全体の風潮として、「学校に行かなければならない」という意識が薄れてきていることが、不登校の多様性を増したと考えられる。従来型の不登校は、「学校に行かなければならないのに行けない」という葛藤が強かったため、登校を刺激しないアプローチが主流となり、それが現在の不登校生徒への対応の基本となっている。ところが、近年は、原籍校への登校に対するこだわりが減り、親や子どもの間でも、フリースクールや適応指導教室などを利用することに対する抵抗感が薄れてきている(滝川, 2005)。また、大検のように、中学・高校と従来どおりに進学しなくても、大学を目指せる方法もあり、子どもの進路に関する選択肢が広がっている。そのため、ちょっとしたきっかけで学校を休むという子どもが以前に比べて増え、学校を休むことに対する抵抗感が減った分、従来型とは異なるタイプの不登校が出現したと考えられる。それにも関わらず、不登校の背景にある問題を正しく査定する前に、「学校へ行けない」という現象に対応すべく、ただ登校刺激を避けたり、フリースクールや適応指導教室を安易に選択したりしてしまう事例も少なくないように思われる。課題や目標がはっきりしないまま、子どもを葛藤のない環境に慣れさせてしまうことは、不登校を必要以上に長期化させ、子どもの社会性構築の機会を逸することになり、引いてはその後の社会的自立や適応の遅れにもつながりかねないことが憂慮される。

第3に、親からの過剰な関わりにより、内発的な欲求を感じられない子どもが増えていることも、無気力な不登校が増加している一因と思われる。鍋田(1999)は、現代の子どもが抱える悲劇は「自分の感覚を失う」という悲劇であると述べている。自分がこうしたいという意欲やこうなりたいという欲求が沸いてくる以前に、親の期待や心配を押し付けられてしまい、「どうでもいい」「どうせだめ」という諦めや、自己効力感や自尊心の低下を引き起こしていると考えられる。特に現代社会の中では、子どもが親から離れて活動できる場が減っていると共に、親が、子どもの部活動や課外活動に至るまで、子ども以上に熱心になりすぎる事例も多々見られ、子どもが自分自身の世界を確立することや自分で考え行動することを経験する機会を奪われているように感じられる。一見元気に見える不登校生徒の中にも、このようなメカニズムから生じる自信のなさに向き合えず、自ら葛藤を回避している事例や、親が常に先回りして手助けをしてきたために葛藤を感じる機会すらなく、嫌なことや困難なことを無意識に避けてしまう子どもの事例が見受けられる。このような場合は、親子関係の影響が大きいいため、家庭に対する働きかけも必要と考えられる。

第4に、子どもの対人関係における耐性が弱く、ちょっとした躓きが非常に大きなストレスとなり、不登校になる事例も増えており、日常の対人関係上の問題を解決するスキルが発達的に未熟であることも、不登校増加の一因であると考えられる。現代の、特に都市部の子どもは、児童期や学童期に外で集団遊びをする機会に乏

しく、また、核家族化や兄弟姉妹数の減少に伴い、人の中でもまれる体験が大幅に減っている。また、家庭内でも子ども中心になり、大事にされすぎる分、かえって対人関係スキルを訓練する機会が乏しくなっている。そのため、対人関係スキルが身につけづらくなっており、一見大人から見ればたいしたことではないと思われる出来事を気に病み、登校できなくなる事例が増加していると思われる。このような子どもは、小学校時代は先生の配慮や友達の影に隠れて目立たず、守られていることも多い。中学生になり、人間関係がうまくいっている間はさほど問題はないが、あらゆる場面で主体性を求められるようになったり、友人関係でのちょっとしたトラブルをきっかけに、問題が表面化することもある。きっかけとなる出来事は、周りの人々から見ればたわいのないことであっても、本人はどのように対処したら良いかわからず、思わぬ葛藤を抱えてしまうように思われる。

第5に、最近注目されている状況として、学習障害(LD)や注意欠陥/多動性障害(AD/HD)等、発達障害の子ども達の二次障害的な不登校が挙げられる。このような個性を持った子ども達の数が昔に比べて急増したとは考えにくいいため、現在これだけ注目を集めるようになったのには、それなりの背景があると言えよう。時代の変化に伴い、例えば「勝ち組」「負け組」というラベリングにも見られるように、日本はかえって多様性を受け容れない社会になってしまっているのではないかと考えられる。また、その他にも、保護者等による虐待が、子どもの不登校や不登校傾向の背景にある事例もある(森嶋, 2005)。これら様々な事情を鑑み、新たな観点から不登校の実態や対応等を検討することが必要と考えられる。

多様化する不登校像

鍋田(1999)は、従来の分離不安型・優等生の息切れ型の不登校に加え、現代の不登校に特徴的なタイプをまとめている。それを参考に、実際に学校現場で目にする主な不登校のタイプを以下に示す。

(1) 優等生の息切れタイプ(従来タイプ)

感受性が強く、周囲、特に母親の願いや期待を敏感に察知し、その期待に応えようと、親の敷いたレールから外れないようがんばる傾向が強い。思春期に入ると、大人の期待する「良い子」でいることの息苦しさを感ずるようになり、周囲の期待と自立への内的要求との葛藤から疲れや身体症状を訴えたり、行動化したりすることによって、不登校になることが多いと思われる。本人の中では、「学校に行かなければ」という思いが強いため、行けないことに対する葛藤が大きく、また、親も子どもの急な変調に動揺し、何とか登校させようと奮闘するなど、親子ともに問題意識が高く困っているタイプといえる。

(2) 浮遊タイプ(鍋田, 1999)

鍋田(1999)によると、このタイプは最近増加傾向にあり、親子の必要なコミュニケーションがほとんど成立

していないことが要因になっていることが多いという。情緒的な関係の形成が困難であり、関係性の問題やいじめをきっかけに休むようになるケースが多く見られる。治療や支援のための面接を重ねても、治療者や支援者との関係性が成立・発展していかない傾向があり、本人の中に知識や情報は溢れているものの、人間関係は希薄で内的な発展性が乏しいという特徴が指摘されている。親は情緒的な関わりが苦手な場合が多く、子どものことがよく理解できないため、積極的にどうかしようというよりも、ただ静観する等、諦めの様相が見られるが、内心はどうしたら良いのかわからずに困っている場合も少なくないと思われる。

(3) 一見元気なタイプ

このタイプは、自分の好きな世界を持ち、外に向かうエネルギーも高いが、気に入らない体験への耐性が弱く、周囲が自分の思い通りに動かないことに対するストレスを非常に強く感じると思われる。そのため、同年輩者との対人関係がうまくいかなかったり、集団生活で気に入らないことがあったりすると、回避的に休み始める。その際も、気に入った友人とは遊ぶなど、完全に引きこもることは少なく、ちょっとしたきっかけで環境が自分の気に入る方向に変化すると急に登校することもある。しかしながら、他者から配慮される人間関係を当たり前と捉える傾向が強く、さまざまな葛藤を乗り越える力が育まれていないため、嫌なことがあるとまたすぐに休むということを繰り返す、ずるずると長欠になるケースも多いと思われる。親は子どもときちんと対峙することができず、子どもに振り回されてしまう傾向が見られる。

(4) 受身なタイプ

自分から話しかけたり、関係性を作ったりする力が弱く、周りに働きかけることができず、対人関係の緊張や疲れから不登校になるタイプである。このタイプは、小学校では細やかな支援に支えられ登校できるが、中学校へ上がり、より主体性が求められるようになったり、頼りにしていた友人とクラスが離れたたりすることをきっかけに、不登校になることが多いと推察される。自ら働きかけていけないことが問題であるという自覚がある子どももいるが、中学入学後すぐに不登校になる場合等は、問題の自覚がないまま行けなくなる場合も少なくないと思われる。子ども自身のパーソナリティ傾向による部分も多いが、親が心配性で過保護・過干渉な傾向があることも多く、そのような関わり方が子どもの主体性の育成を妨げている可能性も考えられる。

(5) 特別支援が必要なタイプ

低学力や学習障害等により、授業についていくことが困難になり、学校生活が苦痛に感じられてくるタイプである。例えば、友達からからかわれたり、提出物等をきちんと出せなかったりすることをきっかけに、行き渋りが出るケースがよく見られる。子どものやる気がないように誤解されることも多いが、特に中学校では二次障害の出方が強くなるため、本来の困りごとが見えにくくなっている事例も多く見受けられる。精神論では問題解

決には至らず、正確なアセスメントに基づいた環境調整や個人に合わせた支援が必要と思われる。

(6) 従来とは異なるうつタイプ

医療機関で「うつ病」の診断を受けるものの、投薬治療による効果は見られず、病気を理由に気まぐれな登校をし、ともすれば本人も家族も「うつ病だから仕方がない」として、現状に止まるタイプが稀に見られる。病気を治したいというよりも、病気であることを主張して、周りの対応を求める傾向が見受けられる。本人が好むイベント等には元気に参加できても、その後の回復にはほとんどつながらず、連続性がないのも特徴的である。

不登校支援の現状

1960年代以降、不登校に対する支援方法としては、登校に対する強すぎる葛藤を軽減するために、登校刺激を避けるというアプローチが主流であった。ところが、不登校の多様化に伴い、単に登校刺激を避けるだけでは、かえって不登校が長期化してしまうケースもあり、早い段階での学校からの切り離しは、しばしば問題解決や学校復帰を困難にする可能性があることが指摘されている(田嶋, 2005)。文部科学省の『今後の不登校への対応の在り方について』においても、「登校への働きかけの適否を考える上で大切なのは、不登校児童生徒の状態や不登校となった要因・背景等を把握した上で、適時・適切に、かつ個々の状況に応じて対応するという視点」の重要性が報告されている。多様化する不登校像に伴い、不登校生徒の状態と問題及び環境の査定に基づいた、個々のケースにあった対応が求められている。

また、不登校問題では、生徒本人に会えない場合が多いことや、個人・家庭・学校・地域における様々な要因が複雑に絡む事例が増えていること等から、学校・家庭・地域が連携して問題に取り組むことが必要と考えられる。例えば、田嶋(2005)は、近年、「葛藤の少ない不登校」、「無気力型の不登校」、「非行・怠学と区別しがたい不登校」、「教育ネグレクト等福祉領域との連携が必要な不登校」など、本人の相談意欲が低い不登校の増加を指摘し、不登校の心理臨床では、個人カウンセリングよりも保護者や教員をはじめ不登校の子ども達に関わる周囲の人々のネットワークを活用したアプローチを推奨している。つまり、従来型の葛藤の強すぎる小児神経症的な不登校は、「学校に行かなければ」「学校に行きたい」という思いを内に強く持っているため、ゆったりと神経を休ませることで、再び学校へ行き集団と関わることへの内的欲求が自然と沸きあがってくるというものであった。それとは異なり、葛藤が少ないタイプや葛藤を回避しているタイプは、子ども自身が困っていない(もしくは、困りを訴えることができない)ため、放っておいても必要な内的欲求が沸いてこず、きっかけもつかめずに、長期的な引きこもりに陥る可能性が高いと思われる。そのような子どもには、何らかの形で周りから働きかけるアプローチが必要であると思われる。

不登校のタイプ別対応の検討

ここでは、上記の不登校支援上の課題をふまえて、現代の不登校について、タイプ別に基本的な対応のあり方を検討する。

(1) 優等生の息切れタイプ（従来タイプ）への対応

このタイプに関しては、従来からのアプローチが有効と思われる。ただし、登校刺激を避けるにしても、関係性の維持は重要であり、本人に会えない場合は親と定期的に連絡を取り続ける等、田嶋（2005）が言うところの「逃げ場を作りつつ関わり続ける」という姿勢で、本人の元気が回復するのを待つことが大切である。また、このタイプは、子ども本人の心理的葛藤が強く、保護者の問題意識も高いので、必要に応じて、スクールカウンセラーや外部の相談機関、医療機関等の利用を検討することも有効と思われる。このタイプは、子どもと保護者がともにその葛藤を乗り越えたときに、本人が自立に向けて大きく成長する可能性が高いと思われる。

(2) 浮遊タイプ（鍋田，1999）への対応

このようなタイプの子どもは、不登校状態に対する葛藤が少ない上に、人との関わりを自ら積極的に求めることをしないので、子どもを登校に導く資源が少ないといえる。また、親子のコミュニケーション不足の問題等から、子どもに二者関係をこなす力が十分備わっていないと考えられる。ある人間関係がうまくいかないということは、それ以前の発達段階での人間関係によって形成されたものによることが大きいという指摘もあり（松元，1996）、二者関係が成立しないということは、かなり初期の発達段階における躓きが想定される。そのため、すぐに現実的な葛藤に対峙できる段階ではないと推察される。将来の自立を視野に入れて考えてみると、まずは他者との関係性を築く力を育むことが優先であり、具体的には、まずは子ども本人の興味ある話題から入り、相談者（例えば、担任教師やスクールカウンセラーなど）と本人の間に少しずつ二者関係を築いていくことから始める必要があると思われる。なお、保護者自身が子ども時代に情緒的に関わってもらった感覚が薄く、子どもに対してどのように接して良いかわからないような場合は、保護者支援も平行して行うことが重要であろう。

(3) 一見元気なタイプへの対応

このタイプは、ルールや規範に関する意識が乏しく、反抗しているというよりも、なぜ自分の好きにしているのか理解できないようである。葛藤を感じる前に、嫌なことを回避してしまう傾向があるため、耐性が身につけていないと考えられる。更に、保護者が学校にあまり価値を置かない場合や、子どもに規範を与えることが苦手な場合は、対応がより困難になると推察される。このような子ども達は、我慢することによる達成感を味わうことをほとんど体験せずにきているため、本人に合わせた課題を設定し、励ましながら、スモールステップを積み重ねていくような支援が必要と考えられる。「満足の遅延」（濱口，2000）、つまり、「すぐに手に入れら

れる価値の低い報酬を断念し、より価値の高い報酬を得るまでがまんする」ことにより、「やればできる」「できると気持ちが良い」という感覚を体験していくことが肝心と思われる。行動療法的に、徐々に子どもが乗り越えられるくらいの葛藤を与え、本人なりに考えて行動決定する作業を繰り返すことにより、現実検討力を培うことができると思われる。

(4) 受身なタイプへの対応

松尾（2000）によると、引っ込み思案な子どもには、社会的スキルが欠如しているタイプ、不安が強いタイプ、人と関わることへの動機づけが低いタイプがあるというが、ここでいう受身なタイプは、社会的スキルの欠如型及び不安型と言えよう。このタイプは、内的な発展性があるため、不登校という状態になってしまった自分についての問題意識は高いが、どうしたらいいかわからず困っているといえる。内的な葛藤は大きいですが、それを外に訴える力が不足しており、本人が問題を整理できるようになるまでに時間を要する可能性が高いと思われる。長い間受身でできていることから、自ら働きかける対人関係が苦手なため、少しずつ社会的なスキルを身につける方法や不安に対処する方法を教え、訓練していくことで、状況への対応力や自信をつけていくことが重要であろう。このタイプの親の傾向として、新しい状況への不安の高さや行動抑制が見られる（松尾，2000）が、親の不安や心配が強く、子どもに対して過保護・過干渉になっている事例に関しては、保護者への定期的なカウンセリングを行う等、保護者を支えることにより、子どもの活動の幅を広げる結果につながると考えられる。

(5) 特別支援が必要なタイプへの対応

何より身近に接する保護者や教師が、本人の困りごとに気づくことが第一であり、それを正確にアセスメントした上で、対応を考えていく必要がある。このタイプの子どもは、学校生活において苦痛に感じる事が多いため、学校を休むことによって葛藤がなくなると、家庭にこもったまま安定してしまうことがあるので、注意が必要である。子ども本人の良いところを見つけ、励まし伸ばしつつ、スモールステップで目標達成体験を積み重ねていけるよう、支援することが大切と言えよう。子どもに特別な配慮や支援を提供していく上でも、家庭との連携は重要であり、必要に応じては、外部の相談機関や医療機関と連携することを視野に入れて対応することが必要と考えられる。

(6) 従来とは異なるうつタイプへの対応

このタイプへの対応は、学校・家庭・医療機関での連携が図れるかどうかで鍵になると推察される。基本的には、医療機関から出される方向性に家庭も学校も従いつつ対応するわけであるが、その際家庭からだけでなく、学校から提供される日常の様子というのも極めて重要と思われる。このタイプの子どもは、葛藤が生じると、病気を理由に困難を回避する傾向が強いようである。学校と医療機関でカンファレンスを開き、その子どもに対する方針と関係者の役割を決め、組織だった対応ができる

ようになれば理想的であると考え。

まとめ

本論文では、多様化する不登校の要因・背景および現状の課題を整理し、自立を目標とした不登校生徒への支援のあり方について、葛藤を鍵概念として検討した。不登校生徒とその保護者がどのような葛藤を抱えているのか、どの程度悩んでいるのか、課題として与えるにはどの程度の葛藤が生じるような内容に設定したら良いのか等、不登校生徒とその保護者をアセスメントする上でも、支援方法を考える上でも、葛藤は重要な概念と考えられる。このように整理してみると、現代の不登校は、その要因・背景も多様であり、その支援のあり方を一概に説明することは困難であるが、いくつかの共通する重要なポイントがあるといえる。第1に、どのようなタイプであっても、子どもとの関係を切らないことである。例えば、登校刺激を避けた方が良い時期でも、保護者を通して本人の様子を理解する、保護者が非協力的もしくは批判的であっても、事務的な連絡等を利用して時折様子を窺う等、子どもとの直接的な関わりはもてなくても、子どものその時々状態を把握しておくことが重要である。第2に、不登校生徒個人と周りの環境をきちんとアセスメントすることが必要である。これだけ不登校のあり方が多様化してくると、対応の仕方によっては返って状態を悪化させてしまう恐れがある。初期段階で幅広く情報を集め、この状態像に至る問題の本質とアプローチの仕方を見立て、個別に計画を立て、それを検証しながら支援を進めていくことが重要と思われる。第3に、様々な資源の活用を視野に入れておくことも大切と考える。現代の不登校の背景には、学校の問題だけでなく、本人のパーソナリティ、家庭、社会など、様々な問題が複雑に絡み合っている場合が増えており、学校だけで対応できる問題ではなくなっている。外部の専門機関との連携は、事例によってはとても有効な手段である。また、現時点で利用できる資源はもとより、卒業後の子どもの将来的に役立ちそうな情報を得ておくことは、同様の問題の再発防止にもつながるであろう。第4に、チームワークによる支援体制作りである。クラスに1名でも

不登校生徒が出ると、クラス担任は他の数十名の生徒に対応しながら個別対応をしなければならず、物理的、精神的負担は増大するといえる。不登校は担任教員やクラスだけの問題ではないという視点に立ち、学年、学校、必要に応じては、外部機関との連携を図り、対応できる体制作りが必要と考える。第5に、保護者への支援を大切にすることである。保護者の考え方や価値観も多様化しており、その子どもに対する影響は大きいと思われる。保護者の不安の軽減を助け、保護者との協力体制を作ることが不登校生徒支援の近道といえよう。最後に、不登校の問題は、学校だけの問題ではなく、家庭や社会の問題であり、子どもの自立の問題であるということをもう一度見直した上で、更なる支援策の検討を進めていくことが必要である。

引用文献

- 小杉礼子 (2004) 若年無業者増加の実態と背景—学校から職業生活への移行の隘路としての無業の検討. 日本労働研究雑誌, 533, 4-16
- 田嶋誠一 (2005) 不登校の心理臨床の基本的視点. 臨床心理学, 5, 3-14
- 鍋田恭多孝 (1999) 学校不適応とひきこもり—変わりゆく子どもたちの悩みとその対応—. ころの科学, 87, 20-26
- 滝川一廣 (2005) 不登校理解の基礎. 臨床心理学, 5, 15-21
- 濱口佳和 (2000) 自己制御の発達. 堀野緑 他 (編) 子どものパーソナリティと社会性の発達 北大路書房, Pp. 174-187
- 松尾直博 (2000) 社会的不適応児に対する支援. 堀野緑 他 (編) 子どものパーソナリティと社会性の発達 北大路書房, Pp. 216-227
- 松元泰儀 (1996) 人間関係のつまずきと病理. 斎藤誠一 (編) 人間関係の発達心理学 4 青年期の人間関係 培風館, Pp. 135-167
- 森嶋昭伸 (2005) 文部科学省による不登校理解の変遷. 臨床心理学, 5, 73-75